



三黄瀉心湯

金匱要略

プロフィール

出典は『金匱要略』驚悸吐血胸滿瘀血門で、ここには「瀉心湯」の名で掲載され、吐血、衄血に対し、煎じて頓服するように指示がある。後世、「黄」のつく3種の生薬(大黄、黄連、黄芩)が入っているために「三黄瀉心湯」とも呼ばれるようになった。出血などの緊急時に、「振り出し」で用いることがあり、『漢方診療の実際』には、「熱湯100ccを加え、火にかけて3分間煮沸し、滓を去って頓服する」とある。なお、『傷寒論』に大黄黄連瀉心湯があり、これには本来黄芩が含まれていたのではないかと推測する人も多いが、結論は出ていない。

方解

大黄、黄連、黄芩はいずれも苦寒で、清熱降火の大黄が主薬である。黄芩は上焦の熱邪に、黄連は中焦の熱邪に、大黄が下焦の熱邪にそれぞれ作用し、全体で清熱瀉火・解毒・燥湿の効能を持つ。

四診上の特徴

矢数は、のぼせ気味で顔面紅潮し、気分落ち着かぬ興奮状態の時に、鎮静的に用いるとしている¹⁾。また、出血がある際に止血目的で使用することがある。

大塚は本方の適する証を次のようにまとめている²⁾。

顔面は少し黒みを帯びて紅くなる。桜色ではない。かかる顔面で吐血、咯血、衄血等があれば、先ず瀉心湯ではないかと考える。気分はイライラとして怒りやすく或いは小事にあくせくする者、或いは大言壮語して言動に確実性なきものがある。心胸中に熱感を訴え、それが胸焼けとして現れることがあり、上に出て、口内炎となり、或いは煩となり、煩悸となり、時に心胸痛となる。

出血の場合は、鮮血が出て、貧血の状がないことに注意する。出血していても、手足の厥冷などがなく、むしろ煩熱を訴える者がある。此の出血は吐血、咯血、衄血のみならず、子宮出血、痔出血等となって現れることがある。脈は浮にして力のある者があり、沈にして滑の者があって一定していない。心下痞満の状があって之を按ずるに堅硬ならずして底力のある者があり、又心下に全く異常を訴えない者もある。不眠、頭重、目眩、肩凝りなどは、無い者もかなり多いが、問診に際して注意すべき事項であると思う。便秘傾向の者多く、又一日一行あっても快通しないとか、一日二三行あっても量が少なく、多量に出た後では気分が爽快だと云う者が多い。若し瀉心湯を用いて下痢甚

組成	大黄 1.0~5.0, 黄連 1.0~4.0, 黄芩 1.0~4.0
主治	血熱妄行・湿熱内蘊
効能	清熱解毒・燥湿

だしく、腹痛耐えがたき者、或いは下痢の後で却って気分重く疲れると云う者は瀉心湯の証ではない。方と証が相応する時は一貼を服しただけでも、気分がよいと訴える者が多い。

また、龍野は、「筋肉の緊張はよいがそれほど強くない。熱血的で感情的なところが強い。カッとなると遮二無二やってくるが直ぐ気が変わる。移り気が激しい。真っ赤になって怒る方で、実際赤ら顔で血の気の多い人が多い。外的刺激に直ぐ反応して反射的に行動し、興味や注意が観念逃走的で、意識的な自発行動とか選別的な判断力とかが薄い。一見のんきな顔をしている者が多い。便秘がちである。」と述べている³⁾。

なお、本方は黄芩を含むため、間質性肺炎の発症には注意を要する。

臨床応用

精神系疾患

原典の条文に「心下不定」とあるのを応用して各種精神疾患に用いられるが、症例集積研究は少ない。うつ病に対しては数例の症例報告のみであり、漢方単独の治療経験もある^{4,5)}。

尾崎らは、不安、焦燥感等を認めた統合失調症6例、心因反応3例、心身症2例、計11例に対し、三黄瀉心湯を4週間用いた結果、4週後に諸症状が著明改善1例、中等度改善5例、軽度改善4例、不変1例、悪化はみられなかったと報告している。有効率の高かった症状は不安感と焦燥感で10/11例(90.9%)で、有効でなかった症状は抑鬱気分、意欲低下が1/6例(16.7%)、幻覚妄想1/5例(20%)であったと報告している⁶⁾。また、春田らは3例の統合失調症と1例の非定型精神病患者のアカシジアと精神症状に対し、三黄瀉心湯を投与した。2例は桃核承気湯を併用したが、いずれの症例においてもアカシジアが消失し、精神症状も安定したと報告している⁷⁾。

仙頭は、便秘と煩熱がみられた透析患者の不眠に用いた症例を2例報告している⁸⁾。

心身症的症状に対する報告は古くから多数ある²⁾。早崎らは、脈が沈、虚で倦怠感と物忘れ、パニック発作、脈弦の無気力と不眠の3例に対し三黄瀉心湯が有効であったと報告し、一般に実証の処方と云われているが、精神症状を心気不足、心気不定と解釈することで応用範囲が広がるのではないかと述べている⁹⁾。

この他、身体化障害や便秘や易疲労感などの不定愁訴の症例、アルコール性精神病の幻覚、ICU症候群や術後の一過性精神障害、認知症の周辺症状などに対する報告もみられる。森らは、術後に譫妄と異常行動を生じた肝癌と消化管穿孔の2例に三黄瀉心湯を投与して、精神症状が安定したと述べている¹⁰⁾。また、蓮村らは興奮型の認知症の周辺症状に対して本方を用い

ることで安寧な生活を送っている一例を報告している¹¹⁾。また、更年期障害に伴う自律神経症状にも応用されることがある¹²⁾。

循環器疾患

高血圧に対しては、大塚の経験以降使用されることが多くなった²⁾。堀野は高血圧で受診した32例(男性5名、女性27名、平均年齢61.4歳)に対し、三黄瀉心湯を振り出しで投与し、内服前、内服5分、10分、15分、20分、30分と血圧を測定した結果、22例(68.8%)で血圧が低下し、悪化は5例のみであった。内服5分後より平均10mmHgの血圧低下が見られ、30分後には19.3mmHg低下した。心下痞硬は有効例中68.2%、無効・悪化例でも66.7%であったと報告している¹³⁾。

熊木は通院中の高血圧患者において、三黄瀉心湯を投与し、服用前後において血圧の安定効果を比較した。投与期間は14日から924日で、その結果は三黄瀉心湯単独投与群30例/他剤併用群26例で、血圧降下6例/4例、やや降下5例/4例、不変15例/14例、やや上昇1例/3例、上昇3例/1例であった¹⁴⁾。

この他、山田は降圧剤と三黄瀉心湯を併用した6例を報告している。それによると、降圧剤で血圧がコントロールされていても頭痛などの症状が取れない場合や降圧剤を複数併用しても充分降圧されない場合に三黄瀉心湯を併用すると、自覚症状の軽快や血圧安定化がみられると述べており¹⁵⁾、類似の報告もある。

動悸、不整脈に対する効果の報告もある。いずれも症例報告のみであるが、耳に響く心拍や¹⁶⁾、期外収縮を自覚した症例¹⁷⁾、心電図にて上室性頻拍と心房細動¹⁸⁾、心室性期外収縮¹⁹⁾、原因不明の心拍数30の徐脈に対して用いた報告²⁰⁾がある。また、板倉らは小柴胡湯と三黄瀉心湯を併用して高脂血症患者18名に投与した結果、血清コレステロール値、中性脂肪値では有意な変化は見られなかったが、アポA-1の増加とアポBの低下が見られ、抗動脈硬化作用が示唆されたと述べている²¹⁾。

神経系疾患

木元は急性期脳梗塞に三黄瀉心湯を中心とした漢方治療を併用して、自覚症状が改善した1例を報告している²²⁾。また、志賀はしびれと知覚異常を訴えた脳血栓症の急性期に三黄瀉心湯を初日より短期間併用したところ、それ以上悪化せず退院できたと報告している²³⁾。さらに山崎らは、中脳出血で昏睡に陥った66歳の女性に三黄瀉心湯を注腸で投与したところ、認知症は残ったが意識は回復したと報告している²⁴⁾。また、大塚の報告では、構語障害や片麻痺などの後遺障害も改善している²⁾。丸山らは脳血管障害の準備段階において、三黄瀉心湯での血小板機能の薬理作用を検討した報告をしている²⁵⁾。この他、頭痛²⁶⁾、²⁷⁾や眩暈²⁸⁾に対する報告がある。

消化器疾患

早崎らは、虚証と診断された便秘の中年男性に対し本方を投与したところ、便秘と不眠が改善し、さらに変形性股関節症の痛みも軽減したと報告し、病態に心気不足があったと推測している⁹⁾。阿部は、「まくり」に構成生薬が近い三黄瀉心湯を用いて、血清総ビリルビンが15mg/dL以上に増加した新生児54例に、生後日数、体重、分娩様式に関係なく三黄瀉心湯2.5g/日を投与し、非投与群55例と比較検討した。その結果、対照群

と比較し、有意に高ビリルビン血症を改善したが、少数は光線療法が必要であった。よって、光線療法施行前に試みるに足る治療法であると述べている²⁹⁾。

その他

出血に対する報告がある。大塚は子宮出血³⁰⁾と大酒家の吐血²⁾に、坂本は鼻出血を中心に数例の経験を報告している³¹⁾。また、抜歯前に内服していると止血が良好になるとも述べている³¹⁾。中原は外陰部の灼熱感を³²⁾、久永らは睡眠時無呼吸症に応用した症例³³⁾を報告している。松本は緑内障に半夏厚朴湯との合方³⁴⁾を、吉田は黄斑変性症に使用している³⁵⁾。また、皮膚疾患に対する報告も散見される¹²⁾。

【参考文献】

- 1) 矢数道明: 臨床応用漢方処方解説 197-203 創元社 大阪 1966
- 2) 大塚敬節: 瀉心湯について(二) 漢方と漢薬 5 (12) 1347-1352 1938
- 3) 龍野一雄: 一目でわかる処方目録 漢方 1 (5・6) 353-358 1952
- 4) 松橋俊夫: 三黄瀉心湯が奏効した抑うつ状態 新薬と臨床 39(7) 1451-1453 1990
- 5) 伊藤 隆: 三黄瀉心湯が奏効したうつ病の一例 漢方の臨床 54(1) 116-119 2007
- 6) 尾崎 哲 ほか: 三黄瀉心湯の精神科疾患への応用 診断と治療 79(10) 2311-2316 1991
- 7) 春田道雄 ほか: アカシジア・精神症状に三黄瀉心湯が奏効した4症例 日東医誌 50(4) 665-672 2000
- 8) 仙頭征四郎: 不眠などの煩熱症状と「三黄瀉心湯カプセル」 漢方診療 4 116-117 1991
- 9) 早崎幸幸 ほか: 三黄瀉心湯が有効であった4症例 漢方の臨床 55(6) 876-880 2008
- 10) 森 康昭 ほか: 高齢者術後の一過性精神障害に対する三黄瀉心湯の使用経験 漢方診療 9(3) 27-29 1990
- 11) 蓮村幸兌 ほか: 95歳の認知症の母への対応 漢方の臨床 60(1) 155-163 2013
- 12) 上田 啓: のぼせ、ほてりなどの症状に三黄瀉心湯が著効した3例 日本女性医学雑誌 19(suppl.) 126 2011
- 13) 堀野雅子: 高血圧における三黄瀉心湯振り出し薬の効果 日東医誌 53(1・2) 41-46 2002
- 14) 熊木俊郎: 高血圧症に対する三黄瀉心湯の血圧安定効果について 漢方診療 2(4) 36-40 1983
- 15) 山田修久: 三黄瀉心湯とCa拮抗剤の併用について 漢方研究 4 114-115 1991
- 16) 栗津良祐: 三黄瀉心湯が奏効した動悸の一症例 漢方研究 160 1991
- 17) 井齋偉矢: 「不整脈」に「三黄瀉心湯」が著効した一例 日東医誌 57(suppl.) 156 2006
- 18) 坂本登治: 三黄瀉心湯で速効を見た上室性頻拍と心房細動例について 漢方研究 2 46-49 2005
- 19) 坂本登治: 第二報 三黄瀉心湯で速効を見た上室性期外収縮2例について 漢方研究 5 174-176 2006
- 20) 坂本登治: 心拍数30の徐脈に三黄瀉心湯を投与し著効を示した症例 漢方研究 12 368-369 2008
- 21) 板倉弘重 ほか: 高脂質血症患者の血漿アポ蛋白濃度と及ぼす小柴胡湯および三黄瀉心湯の併用療法の効果 臨床と研究 62(10) 3360-3364 1985
- 22) 木元博史: 急性期脳梗塞における漢方製剤併用の一経験 漢方の臨床 48(2) 221-228 2001
- 23) 志賀俊介: 瀉心湯類の使用経験 漢方診療 4(2) 27-29 1985
- 24) 山崎正寿 ほか: 「三黄瀉心湯」の注腸が著効を奏したと思われる昏睡に伴う中脳出血の一症例 第10回日本東洋医学会北陸支部総会要旨集 1984
- 25) 丸山征郎 ほか: 脳虚血性疾患およびその準備状態に対する漢方 漢方医学 6(10) 12-19 1982
- 26) 中平 圭: 高齢者の30年来の頭痛に対して三黄瀉心湯が奏功した1症例 第27回日本疼痛漢方治療研究会学術総会抄録 11 2014
- 27) 高久 俊 ほか: 片頭痛に対して三黄瀉心湯が著効した一例 日東医誌 62(suppl.) 168 2011
- 28) 古橋建彦: 三黄瀉心湯が奏効した眩暈の一例 日東医誌 53(suppl.) 277 2002
- 29) 阿部忠行: ツムラ三黄瀉心湯が新生児高ビリルビン血症におよぼす影響 漢方医学 10(5) 31-36 1986
- 30) 大塚敬節: 症候による漢方治療の実際 680 南山堂 大阪 1990
- 31) 坂本登治: 三黄瀉心湯の使用経験-鼻出血・脳出血など- 漢方研究 10 397-398 2001
- 32) 中原恭子: 三黄瀉心湯の著効2例 漢方研究 10 391-392 2010
- 33) 久永明人 ほか: 三黄瀉心湯の随証投与で睡眠時無呼吸が改善した1例 日本睡眠学会第23回定期学術集会プログラム 121 1998
- 34) 松本一男: 東洋堂経験余話(63) 漢方の臨床 41(7) 869-871 1994
- 35) 吉田 篤: 黄斑変性症に対して三黄瀉心湯で経過をみている症例 第27回眼科と東洋医学研究会講演要旨集 2010